

はしがき

大学の授業をいかに改善するか。これは、いま全国の大学で最も注目を集めているトピックのひとつといえるだろう。

1991年の大学審議会の答申と大学設置基準の改訂をきっかけとして、大学教育の内容・方法の改善に関する関心が高まってきた。同時に全国の大学で教育・研究に関する自己点検や自己評価が盛んに行われるようになった。しかし、大学の教授学習に関する体系的な研究や組織的な研修活動はまだ行われていない。特に教授学習過程を直接対象とする研究は、これまで、初等・中等教育での授業を扱ったものがほとんどであり、高等教育に関するものは未開拓の分野といえる。

本研究プロジェクトは、このような状況をふまえ、平成5(1993)年度に藤田恵璽教授(現聖心女子大学)を主査として3年計画で発足した。平成6(1993)年度に伊藤が主査を引き継ぎ、名称も「大学における教授学習過程の映像記録と改善のための映像資料の研究開発」から、「教授学習過程の映像化による大学の授業改善の研究」へと変更した。現在は、高等教育研究室の掲げるテーマのひとつである「メディアによる教授法と評価」の中に位置づけられている。

本研究には、前身となる2つの共同研究がある。「教育番組のタクソノミーの開発および視聴学習行動の基礎研究」(1986年-1990年)と「映像教材の構造と効果に関する理論的・実践的研究」(1991年-1992年)である。これらの研究プロジェクトでは、映像教材の構造とその学習効果を分析することによって、教育情報の送り手と受け手の相互作用を明らかにし、効果的な映像教材開発に役立てようとしてきた。

本研究は、これらをもとに、研究のフィールドを大学における教授学習の実際の場面へと拡張しようとするものである。10年近くにわたって蓄積された研究成果は、本研究プロジェクトにそのまま引き継がれ、発展させていくことができるものと思う。すなわち、教授と学習に関する基本的な考え方や研究の方法論、映像分析のための理論的研究や具体的手法、そのために開発されたシステムなどである。

第1章でものべるように、本研究の特色のひとつは、教授者が自らの授業を研究対象として、工夫・改善していくことにある。そこで、教授者の自己学習を支援するための研究開発が、共同研究の重要な課題となる。長い間“聖域”といわれてきた大学の授業の改善には、画一的な教授法を提案するよりも、このような方法が効果的ではないかと思う。また、ビデオによって大学の授業の実際の場面をとらえることは有効な手段のひとつである。これによって、改善のための具体的な手法をモデルとして提示することができるからである。

本研究プロジェクトでは、平成6年度に共同研究員の公募を行い、6名の先生方が参加された。従来のメンバーの先生方も交え、授業改善に関する事例の紹介や活発な討論が行われた。これまでに、さまざまな実践例や研究成果が蓄積されつつある。

また、昨年11月にセンターのオープンハウスの一環として公開研究会を開催し、研究成果の一部を発表した。全国から80名を越す参加者があり、このテーマに関する関心の高さがうかが

われた。

それだけに、われわれの役割も重要であり、大学共同利用機関としてしっかりとした研究成果を全国の高等教育機関に提供していきたいと考えている。そのためには、基礎研究と応用研究を相互に関連させながら進めていく必要がある。すなわち、教授学習過程の基本的な問題について研究を積み重ね、それに基づいて改善の具体的な方法を提案していくことである。

これまで、大学の授業改善は、教授者ひとりひとりの実践の中でのみ検討されてきたが、これらを科学的研究の対象としていきたい。そのための方法論を確立していくことも本研究の今後の課題である。

この報告書は、中間報告として、平成5年度と平成6年度半ばまでの研究成果をまとめたものである。お忙しい時間をさいて論文を寄稿していただいた先生方には心から感謝の意を表したい。なお、大野木先生には、1987年度－1990年度に研究協力者として参加していただいたが、今回も快く授業の実践例を提供して下さった。あわせてお礼を申し上げる次第である。

最後に、この研究プロジェクトの推進にあたり、ご支援いただいたき、研究成果に多大な期待を寄せられた加藤秀俊所長および、研究開発部長菊川 健教授に深く感謝するものである。本報告の刊行に際し、われわれの研究に対して、多くの方々のご関心とご助言を賜るよう心から願っている。

平成7年1月

共同研究主査

伊 藤 秀 子